

試し読み

身体論

知古文庫

当ファイルを許可無く印刷またはインターネットを介して
第三者へ配布することを禁じます。

身

しん

体

たい

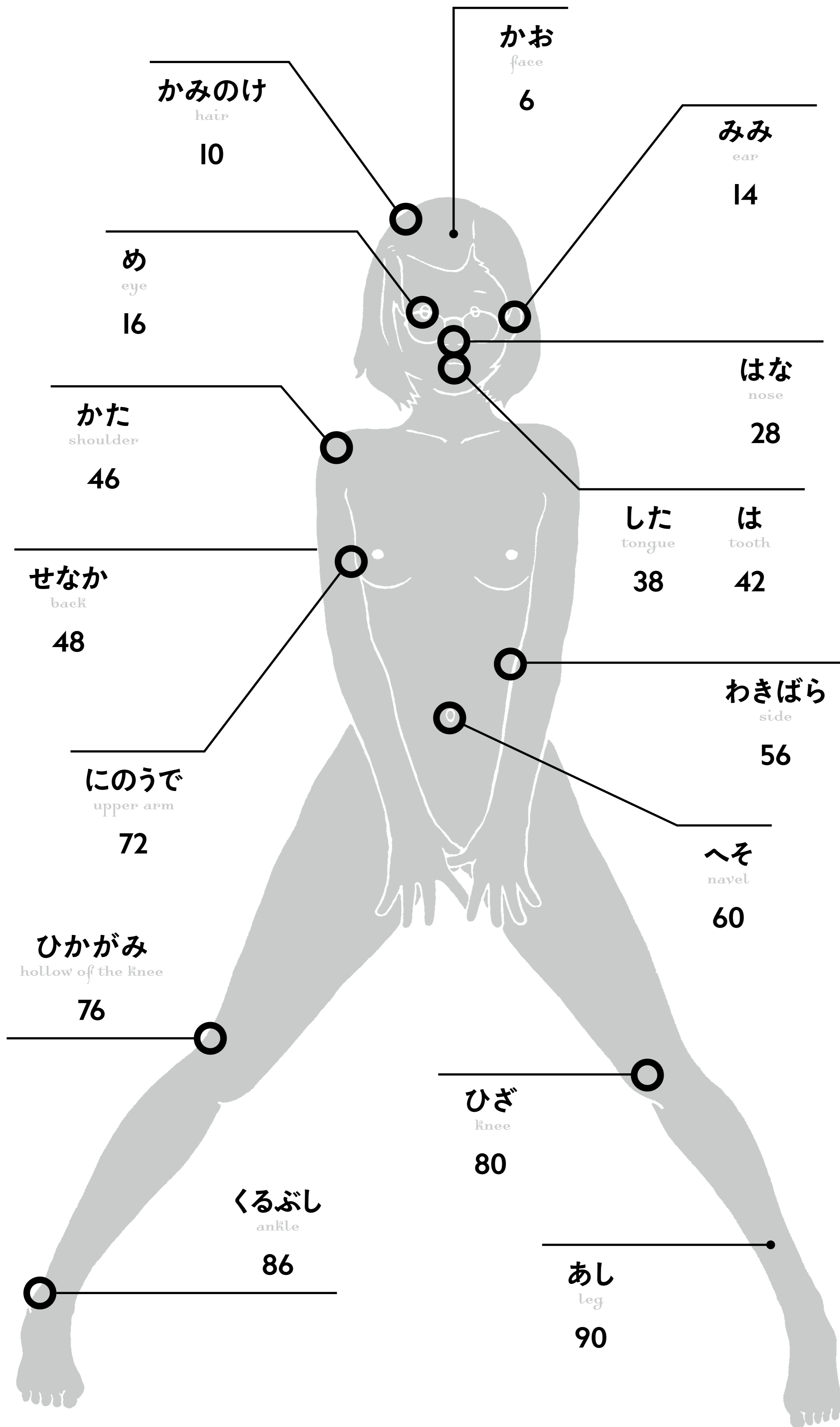
論

ろん

いかみながしよき
知古つとむ 著

画

知古文庫





身体論

かみみのけ

髪の毛
について

逃げなきゃいけなかった。振り向いてはいけなかった。できるだけ早く、その場を離れなければいけなかった。まばたきを止めた。つばを飲みこむのも忘れた。タイムングは紙一重。だけど捕まれた。引きずり倒された。……あと一センチ短ければ。

金曜の夜から、もう二四時間以上ベッドにもぐりこんだまま過ごしていた。通知がこないだろう携帯はほろりだしたまま。「DVオトコだったんだから、むしろ別れてよかったのよ」と慰める友だちからのメッセージにも倦

んだ。たしかにイビツだった。雑に扱われたし、殴られることもあった。お金も貸した。客観的に見れば、カレはヒモで、私は易いオンナ。だけど、私は私なりに愛していた。依存でも搾取でもなく、私はカレとまっとうに歩もうと、ふたりの未来を描いていた。だからカレが「二度と戻らない」と怒って出ていったとき、ふつうに恋として悲しかった。まがりなりにも私にとっては大失恋だった。

陽の光を避けて、がらんとした寂しさに横たえていた

けれど、窓の外から、近所の子どもたちだろうか、舌足らずな口調ではしゃぐ声が聞こえてきて、そうしたら、いつまでベッドの中にもしよるがないと思った。ひとまずは立って、そしてなにかを、ほんのささいなことでもいい、水を飲んで乾いた喉を潤す、お腹はすいていない、だけど、せめてパンのひとかけくらい食べておこう、パジャマから着替える……そうやって、自分をたもっていかなければ……生きていく以上は。歯を磨く、顔を洗う、失恋は失恋だ。たとえ比重が大きかったとしても、命を奪うほどのものじゃないはずだ。生きていくだろう、たいていの人間は失恋で死んだりはしない。くしゃくしゃになった髪をとかす……そうだ、髪を切りにいこう。失恋して髪を切るなんてあまりにアナクロな行為に、自分自身バカバカしい気分になるだろう。それでいい。それでも。

服を着替える、簡単だけど化粧していく。携帯は……いいや置いていこう。床にころがったまま、充電だって切れているはず。

休日なのに美容院はすいていた。「ばっさり」と云おう

かと思って、それも余りにベタ。だけど、カレがよく私の髪の先まで、すつとなぞるように撫でてくれたな……なんて思いたすなんて、それもベタ。結局ほんの少しだけ、いつものように毛先をそろえる程度で、まあ、それだけで、すこしすっきりした。

「なぜ電話に出ないんだ」と云った。「連絡無視してどこに行っていたんだ」と云った。「二度と戻らない」と云って出ていったカレなのに、いつものように、あたりまえのように部屋に座っていた。そして、いつもの怒鳴り声。

お酒の臭いがした。こんなときは話しかけないようにと、近づかないようにしておかないといけないと、なにかが起こったら刺激してしまった私が悪いのだと、いつもそう気をつけていた、そんな状態のカレだった。怒っていた。金曜日の晩のつづき、憤りがそのまま残っているようだった。マズいと思った。カレが帰ってきてウレシイとか、自分から出ていったのにいまさらどうとか、恋愛とかなんだとか、そんなことよりも、逃げるために身をひるがえしていた。

癡猛だった。すぐにカレも走りだし、腕が伸びた。そ

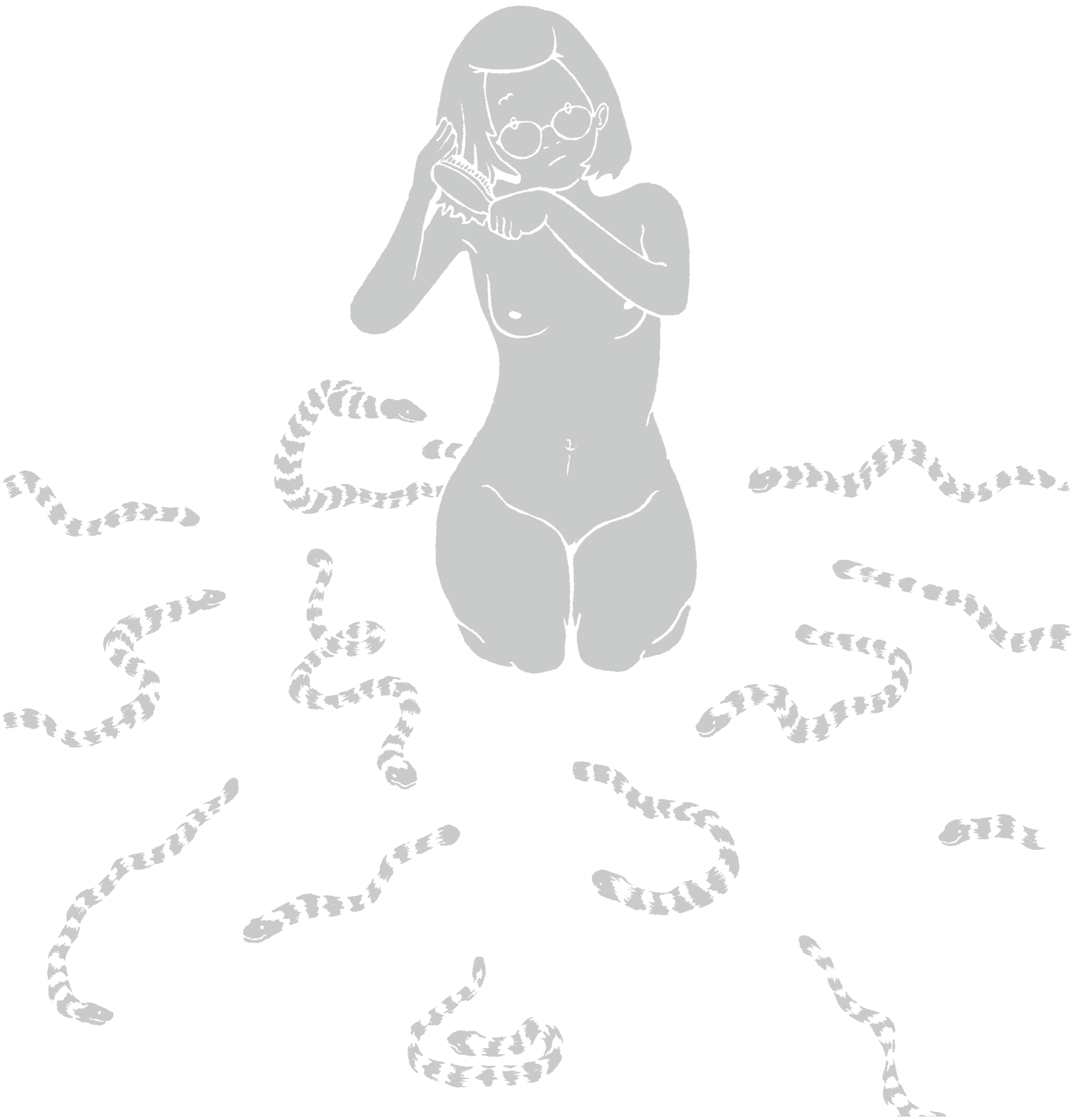
れは人間というよりもケモノのような動作。髪を捕まれた。ときにはやさしく撫でてくれたその腕で、ときにはやさしく撫でてくれた髪を掴んで、思い切り床へたたきつける。あと少し短く切っていたなら、そのまま扉を抜けて、どこか、友だちの家だろうか……警察には、まがりなりにも愛していたカレのことを考えれば行けないけれど、きつと逃げこめた。

カレの叫ぶ声がある。どこかで鈍い音がしていた。だけど私にはもうどうでもいいような気がしていた。カレの叫び声が、遠くなったような気がする。

メデューサって神話の中に出てくるやつだった。髪の毛が蛇になっている女、たぶん悪いヤツね。いま、自分の髪が蛇になって、カレの手に巻き付けられたらいいなと思った。掴んでいる指や腕にぐるぐる絡みついて、離れられなくしてしまいたい。すこし噛んだりして。メデューサの蛇は毒を持っているのかな。殺してやりたいっていうんじゃない。カレはこの先、きつと社会で大変だと思う。いまさらカレを庇うとか、そういう気持ちじゃなくて、同情……それに私、ひとりもなんだか寂しい気

がして。だったら、絡み合って、離れられなくして、こりやって重なりあって、一緒に行くのはどうかなくて。ああ、それって、やっぱり殺しちゃうことになるんだよね。悪いヤツだな、私。

愛される女、とおなじくらい毒のある女になりたい



みみ

にっつて
耳

「この唄いいよ」と渡された右耳。聴いてみたけど、片耳だけのイヤフォンは、ハモるはずのコーラスも遠く、ベースの低い音ばかりが鮮明に響いていて、なにがいいのかちっともわからなかった。きっと、そっちもそんな感じになってるだろうと、マイフェイバリットソングをモノラルで聴かす愚行にそろそろ気づくはずだろうと、あきれた感じで振り返ると、頬をまっ赤にして、じっと聴き入っているような顔をしていた。

近い。

途中で結び目ができているイヤフォンコードの短さに、そのとき気づいた。並んだ顔の近さ、体温まで感じられるようで、私も赤面した。かっとな熱が上がった頭の温度。悟られないかと、焦った。鼓動が高鳴る。脈拍の振動も、ゴクリ喉に押しこむツバの音も、イヤフォンを通して、そっちまで響いてるんじゃないだろうか。

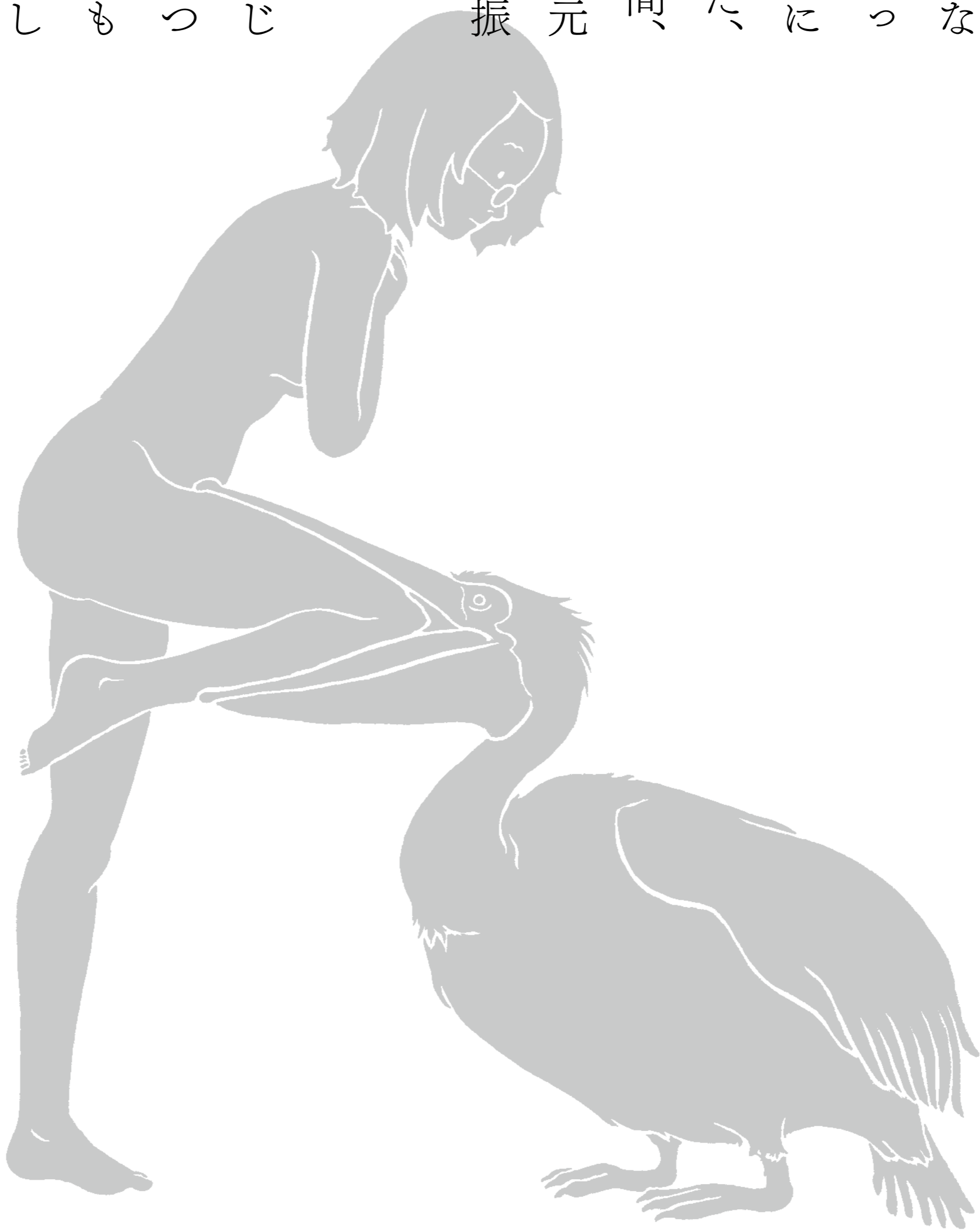
近い。

汗の匂い。息づかい。動揺を悟られるのが恥ずかしくてすましたフリ……は、多分そっちもおなじで、共鳴、

ココロも気持ちもたぶん、いまおなじことを考えている。ダメだ。恥ずかしいけど、なんだかシンクロ率ハンパない。イヤフォンを通して、わたしたちひとつにつながっているような気分になって、いまそっちの気持ちをなにもかもわかっているような気分になってきて……ダメだ、こんなの。距離を取ろうと、そっと離れようとした瞬間、そこかしこで絡まったコードがぴんとつっぱって、耳元のイヤフォンがガサガザ鳴る。それに驚いてビクッと振り返る。耳たぶがわたしの頬にかすった。目が合う。

近い。

ダメだ、ダメだ。わたしはまぎらわしに、鼻歌をはじめる。知らない曲なのに。「何それ知らない」って悪態ついたから、「聴いてみるよ」と渡ってきた右耳なのに。もう、当てずっぽ。自分自身を斜め上から客観的に想像してみる、イタい、痛々しい。顔を赤くして、ハズれた音程で、脇を汗で湿らせながら歌ってる姿。早く止めてよ。そっちもイタタマレナイ顔で私を見てるじゃん。なんとかしてやめさせてよ。その腕とか……その唇とか使っただまらせてくれていいんだからさ。



すべてを与えてしまいたいと思う夜もある